

コミュニケーションカードを用いた授業改善の試み

南部昌敏*

(平成16年10月29日受付；平成16年12月8日受理)

要 旨

教員養成大学における授業改善の方策を探るために、授業者と受講生全員との間でコミュニケーションカードを用いた伝言とコメントのやり取りを毎週継続して行うとともに、受講生からの意見を次の回の授業の改善に反映させる試みを行った。アンケート調査の分析の結果、①受講生から寄せられた理解できたこと、疑問に思ったこと等に対して授業者が確認、訂正、補足説明等をコメントしたことが履歴として蓄積されており、学びの連続性の認識とともに学習内容の理解が促進され、次の学習への意欲向上につながった、②受講生からの授業方法に関する問題点の指摘を受けて、授業者はその次の回に即時に授業方法の改善に反映させたことで受講生との間に信頼関係が生まれ、毎回の授業を授業者と受講生全員で創造しているという風土が醸成された、③教職を目指す受講生にとって、教師の役割を再認識し、授業実践に対する考え方を再考させるきっかけを与えることができたことが明らかとなった。

KEY WORDS

Lesson Improvement	授業改善
Lesson evaluation	授業評価
Communication Card	コミュニケーションカード
Shuttle Card	シャトルカード
Teacher Training	教員養成

1. 問題の所在と研究の目的

授業改善に関する実践的研究は、これまで主に初等中等教育実践を対象として、授業設計・実施・分析評価及び教材開発、学習環境開発等の多領域において取り組まれ知見が積み重ねられてきたが、最近になって、高等教育実践の改善にも焦点が当てられるようになってきた。教育目標や教育内容だけでなく、授業形態や学習指導方法、メディアの活用等に関する具体的方策の改善についても各機関において様々な検討が行われ、実践されている。その中で、授業改善の方法としてよく用いられている方法として、「学生による授業評価」がある。学生による授業評価は、一般に学期末に実施され、およそ15週にわたって行われる授業全体について、授業目標の明確性、授業内容の適切性、教授法の適切性等について、無記名のアンケート調査方式で受講生に選択肢方式及び自由記述方式で回答を求める方法で一般的に行われている。これは、

* 上越教育大学学校教育総合研究センター

次の学期以後の授業改善に活用するために行われるものであり、受講生がさまざまな疑問や意見、改善策を提案しても、その授業の受講生にとっては、「次週の授業の改善」のためのフィードバック情報として直接活用されることはないという問題点も指摘されている。

そのような中、香取（1995）によれば、東海大学では、カリフォルニア大学バークレー校の物理の教員が実施している「Minute Paper」を参考にして、それに授業改善用の評価を加えた「東海大学式 Minute Paper」を開発し、教員が自由に利用できるシステムを設置し、1995年度には約50名が利用している。これは、毎時間の終了時に、今回の講義における point と疑問な点を自由記述で書かせるとともに、今回の授業における自分自身の授業態度、今回の講義における理解の程度を10点法で自己評価させている。また、授業者の話し方、情熱、学生との関係、講義の質、わかりやすさ、講義内容の将来への有効性、講義からの刺激と興味、黒板やOHPの使い方について、よい、悪い、の判断を求めるとともに、総合評価を10点法で求めている。そして、マークシートを用い、集計ができるようにしている。しかし、このシートには、授業者からの返信を記入する欄はもうけられていないので受講生への返却がされているのかは定かではない。受講生から提出された疑問点は次の時間の授業に反映させており、受講生からは高い評価を受けているとしている。そして、その利点として、その都度授業改善を行うことが可能である、評価を行うので毎回の授業に緊張感をもって臨むことができる、学生の理解度や疑問点を知ることができ、学生との対話ができるようになる、疑問点について次回に再度説明をすることで理解できるように指導できる、学生自身の質問事項が取り上げられることにより、シートをよく読んでもらっているという信頼を持つようになり、勉強意欲の高まりが感じられる等を指摘している。

池田ほか（2001）は、コースの途中で学生の理解度をチェックするための方法として、①学生を指名して教師が述べたことを自分の言葉で言い直させる、②授業の終わりに、質問カード、リアクション・ペーパー、ミニット・ペーパーなどを提出させ、授業のポイント、疑問、質問などを書いてもらう、③この時間の中で、「今日の授業で新しく学んだことをまとめましょう」と質問したり、逆に学生からの質問を受け付ける、④指名した学生に授業の重要なポイントを含む問題を黒板で解かせる、という学生自身による自己診断から授業改善への方法を提案している。

一方、織田（1991）は、1982年から自ら実施してきた学期末に行われる「学生による授業評価」に加えて、授業毎に受講生から授業に関するフィードバック情報が学生から得られるならばより細やかな授業改善が可能になるという発想から、毎授業の終了直前に「授業に関する意見や感想」を求める一種の受講カードを考案し、受講生と授業者の双方に「学習も授業も充実する」という大きな福をもたらすカードであるという意味から、大福帳(Shuttle Card “DAIFU-KU”)と命名して活用してきた。そして、織田は、その実践を通して、大福帳には、①授業出席促進効果・欠席防止効果、②積極的な受講態度形成効果、③信頼関係形成効果、④授業内容の理解促進と学習定着効果、⑤自己努力・自己変容過程の確認効果が認められたとしている。そして、大福帳は、実施法が簡単で、短時間に実施でき、学生への負担が少ないなどの実施上の利便性が高く、また、大福帳の導入に対して学生が好意的であるなどの利点が認められるとともに、授業担当者にとっても、大福帳に書かれる学生からの授業に関する意見や感想、時には批判は、授業内容の充実や教授法の改善など、より魅力的な授業実践への意欲を高め、それを持続させる効果があると述べている。それを受け、須曾野は1991年から1993年に三重県内

の公立中学校において技術科において、1997年からは三重大学教育学部、人文学部等において大福帳を用いた授業実践を行っている。また、向後(2002)は、受講生数が100人前後の大規模な心理学のクラスで、大福帳を利用し、質問書方式による授業評価と比較して、大福帳と質問書による効果の違いを検討している。その結果、質問書を使ったことへの評価より、大福帳を使ったことへの評価の方が高かったという結果を得ている。

そこで、本研究では、「学生による授業評価」を筆者自身の授業改善に生かすために、織田の提案する大福帳、いわゆる、シャトルカードに着目した。その理由は、大福帳の表の裏のそれぞれ1行目に「甘すぎず、柔らかすぎず授業のおいしい関係を目指す」「よりよい授業へのアプローチ。あなたも、私も、参加者です。」と記されているように、織田は「授業者は一方向的に情報を提供し、受講生はそれを受容するものである」という考えではなく、「授業者と受講生全員で課題をいっしょに考える場であり、それは授業者と受講生全員で創り上げていくものである」という考えから大福帳を開発し活用してきたのではないかと判断したからである。また、「東海大学式 Minute Paper」と違って、受講生の記述内容に対して授業者が毎回コメントを書いて返却するという作業量の多さはあるものの、シャトルカードとしてのやり取りが授業改善にもたらす情報の質の高さと量の多さを期待したからである。

そして、そのシャトルカードを用いて、受講生と授業者との間での実際にやりとりした記述内容の分析とアンケート調査によって、①授業の内容及び方法等について受講生はどのような疑問や意見・要望を抱くのか、②授業者である筆者自身はそれぞれに対してどのような対応をし、次の授業の改善にどのように反映させていたか、③シャトルカードを用いた授業者と受講生のやり取りの体験が受講生自身の教師としての授業実践の考え方にどのように影響を与えるのか等を明らかにすることにした。

2. 研究の方法

(1)期間：平成15年10月～2月、木曜5限、計13回

(2)授業科目名：「情報メディアの活用」(2単位)(図書館司書教諭資格取得科目・自由選択科目)

(3)受講生：J大学学部3、4年生、院生、計94名

(4)用具：コミュニケーションカード“シャトルカード”(図1にその一部を示す。4ヶ月間毎週、授業者と受講生のやり取りをしても使用できるように、B5版の厚手の画用紙を用い、その表裏に15回分のやり取りが記載できる枠を印刷したワークシート。織田(1991)にならって大福帳という名称はそのまま活用した。本稿では、シャトルカードと記す。受講生が記述したアンケート内容に「大福帳」と記している場合はそのままとした。

(5)毎時間の授業展開：(16:20～17:50)

- ・授業者からシャトルカードを全員に返却する。受講生はシャトルに記された授業者のコメントを確認する。
- ・前時に受講生がシャトルカードに記した意見等の概要の紹介と授業者としての対応について説明する。
- ・本日の講義(小課題の演習含む)を行う。
- ・授業終了10分前に、本日の授業に関する内容の理解、疑問点、授業方法等に関する意見、

感想、要望等をシャトルカードに記入し、提出する。

- ・授業者は、次の週の授業までに94名全員のシャトルカードにコメントを記す。教育実習、就職活動等で欠席することが事前にはっきりしているときは、その回の欄にその旨を記す。体調不良等でやむを得ず当日欠席した場合は、その回の欄に「お休みでしたか」と記し、休んだ理由を尋ねると共に、その回の資料の配付と自学自習の激励文を記す。

※カードの回収と配布を効率よく行うとともに、受講生の顔と氏名を覚え、できるだけ、個人名で指名することできるように、固定座席とした。

以上の一連の手続きを13週にわたって行った。

(6)分析材料と分析方法

- ・毎回の受講生と授業者のやり取りが記されているシャトルカードの記述内容の分析
- ・授業の最終回に行ったアンケート調査の分析

設問：毎回行ったシャトルカードによるやり取りについて、

①この方法を大学で取り入れることについてあなたの考えを書いて下さい。

②この方法を小・中・高校で取り入れることについてあなたの考えを書いて下さい。

上記の自由記述内容を記述者の意図を解釈したうえで、分類整理した。

2003年度（後期）大福帳

表

授業担当： 南部昌敏		授業： 情報メディアの活用		木曜日5限	座席： 列 番
所属：		学籍 番号			氏名
月/日	言いたいこと。聞きたいこと。あなたからの伝言。				あなたへの伝言
No. 1 /				
No. 2 /				

図1 本実践で用いたコミュニケーションカード“シャトルカード”（おもての一部）

3. 結 果

受講生94名のデータは収集できているが、本稿では、その中からランダムに選んだ31名のデータを基にして、その結果を次に示す。

①受講生の抱く授業の内容及び方法に対する疑問や意見・要望について

記述内容のほとんどが、授業内容についてどのように理解したか、どのように受け止めたか、どのように感じ、どのように考えたかであった。内容の説明が理解できなかった事項、追加説明の要望等もあった。たとえば、「今日の授業ではマルチメディア・ネットワークのすばらしさを知った。」「著作権の問題が一番印象に残った、しっかり理解し実践できるようにしたい。」「ビデオで紹介されたメディアリテラシーの授業は私も受講したいと思った。」「市川市の図書館システムととても先進的だ。」「岐阜大学附属中学校で取り組まれている学校と家庭との連携は他の学校でも不可欠だ。」等々である。

授業の方法については、プレゼンテーション(文字が小さく見にくい等)、配付資料(講義の流れに合わせて資料を構成してほしい等)、話し方(プレゼンで示した情報について時間をかけて分かりやすく説明してほしい、早口で聞き取れない、ビデオ映像を視聴している際には同時にマイクで説明されても聞き取りにくい等)、時間配分(小課題への回答及び大福帳を書く時間を確保してほしい等)等に関する改善の要望が寄せられた。また、本講義は、講義名「情報メディアの活用」(図書館司書教諭資格取得科目)でもあり、情報提示は毎回パワーポイントを用いたプレゼンテーション、最新情報のホームページ提示、その画面をノートに写すことをしないでいいように印刷物として配布、参考資料の印刷物配布、全国の学校・社会教育施設における情報メディア活用に現状に関するビデオ映像提示等々、授業方法に関するモデルを示すことに配慮した。受講生からは、情報メディアを活用した実際の場面をビデオ映像でみることができて、講義内容が理解できたという感想や、これから自分自身のメディア活用スキルを磨きたい等の意気込みも記されていた。

その他に、欠席の理由(体調不良、就職活動、部活動等、予定されている場合は事前届出、緊急事態の場合は事後に記述)も記されていた。

②受講生の記述に対する授業者の対応と授業改善への反映について

授業の内容に関する受講生の記述に対しては、肯定的に受容することを大前提にして、理解したことを別の角度から詳細に説明しなおすこと、理解が不十分な箇所については追加説明をすること、ホームページやCD、DVD、ビデオ映像等で紹介したことについて、その背景についての詳細な説明を加えること等について、コメント欄に記して返した。また、それぞれの受講生が記述した理解内容を総合して、全体に理解が不十分であると判断した場面では、次の回の冒頭で、再度解説をして受講生全員にフィードバックした。

授業の方法に関する意見・要望については、そのときに出された、プレゼンテーションの方法、配付資料、話し方、時間配分等の問題点の指摘、改善要求等を次の回の冒頭で全員に紹介し、その回から改善の努力をする旨の宣言をし、具体的に実行に移した。たとえば、早口にならないようにすること、提示した画面の説明を時間をかけて詳細にすること、ビデオ映像等を放映しているときは、同時に説明せず、音声を絞って映像だけみせて説明したり、ポーズで止めて説明したりすること、配付資料の作成に留意すること等の対応をした。

その他に、欠席の理由(体調不良、就職活動、部活動等)も記されていたが、それに対しては、欠席した回の講義内容をできるだけ理解してもらえるように、「この回の学習について当日の資料を配付しますのでそれを読んで自学自習をしておいてください。わからないところは何でも聞いて下さい。」「十分に休養してできるだけ早く体調を回復してがんばって下さい。」等の激励の言葉を記した。

そして、最終回の14回目は締めくくりの試験を実施したが、その開始前に、それまで13回にわたって受講生一人一人とやり取りしてきたことが記録されているシャトルカードを一人一人に手渡しした。

③教師としての授業実践の考え方への影響

授業の最終回に行ったアンケート調査の結果を次に示す。

A. 毎回行ったシャトルカードによるやり取りについて、この方法を小・中・高校で取り入れることについての自由記述内容は次の通りである。() は人数

ア. 教師にとって有益と思われること (19名)

- ①児童生徒が何を学んだかを知ることができる。
- ②児童生徒が1時間の中で何に興味を持ったかがわかるところがよい。
- ③教師と児童生徒とのコミュニケーションとして使われることは有効だ。教師は一人一人の内面をみることができる。その結果生まれる評価が大切だ。教育活動を内省し、さらに上を目指した教育が可能。こどもを多角的にみることができる。
- ④授業中にやりとりできないこと、言えないこと、言い足りなかったことなどが交換でき、たいへんよい方法だ。
- ⑤教師と児童生徒との間で、たいへんよいコミュニケーションがとれる。
- ⑥一人一人の姿を確実に見とれ、きめ細かい指導の徹底につながる。授業の内容が理解できているかなど、子どもに姿がよくわかる。
- ⑦教師が児童生徒の考えを把握できる。
- ⑧児童生徒とのコミュニケーションがとれるのですばらしい方法である。生徒の一人一人の様子や学習の進み具合などがわかる。
- ⑨子どもたちと教師の相互交流が深まるし、意図も伝わりやすい。
- ⑩こどもの声を聞くことで、子どもが理解しているのか、どんなことを思ったのかなど評価にもつながるこどもの声を聞き、次の学習へとつなげることができる。
- ⑪児童生徒がその時間にどの程度理解し、どんな疑問を持ったかがわかる。教師自身の教え方に生かせる。
- ⑫授業改善につながる。
- ⑬こどもの感想、意見から子どもの考えを知ることができ、それにあつた説明をまた付けられる。
- ⑭教師は子どもの反応を見て自分を振り返ることが必要であり、教師の資質能力を高めるためにこのやりかたはよい。
- ⑮生徒が授業内容に対してどう考えているかがわかる。
- ⑯教師と子ども間の共通意識が深まり、授業に対する両者に意気込みが変わってくる。
- ⑰教師と子どもがそれぞれ得るものがたくさんある。
- ⑱高校ではつながりがなくなるので、この方法は大賛成です。
- ⑲授業に対しての評価や子どもたちの到達度を知ることができ、自己の内省、子どもたちの把握につながる。

イ. 児童生徒にとって有益と思われること (20名)

- ①教師のコメントにより、自分の学びが認められていると感じ、意欲が向上する。
- ②自分の言葉で書いてみることで、受動的だった授業への取り組みが積極的になる。難しかった

た内容も、自分の言葉で書いてみることで、自分がどこまで理解できたかを知る手がかりになる。

③着実に成果は上がる。

④1時間ごとの学びの記録である。表であることによって連続した学びがひと目でわかる。自分が考えていたことや考え方を振り返りやすい。教師からのコメントにより、確かな自信や次への成長につながる。児童生徒は自己評価できる。

⑤授業を振り返る場、今後への生かし方を考える場となる。

⑥自分の意見を書き、それに関して、教師の見解が書いてあるのがよい。

⑦授業であいまいだった点を聞くことができる。さらに、次の時間にコメントが返ってくるというのはとても学びやすい。授業が大規模になればなるほど教師との距離が離れてしまうので、この方法はとても意味がある。

⑧いままで自分が学習してきた軌跡がわかり、達成感が残る。

⑨前回学んだことをその時間だけに終わらせるのではなく、次の時間に振り返り、教師の意見を聞くことができる。

⑩児童生徒としても、教師とつながっているという感じがして、フレンドリーな気分になる。

⑪自分の書いたことに教師が必ず返事をくれるので、コミュニケーションが深まるし、教師を信頼することができ、何でも書くことができる。

⑫授業者と学習者が結びついているように感じる。

⑬教師とのやり取りで学ぶものはより大きくなる。

⑭授業1コマ1コマに対する意見交換がなされ、教師と生徒とのコミュニケーションになりとてもよい。

⑮質問などがしやすい。

⑯個人でふりかえりができる。教師からの直接のアドバイスにより、授業中の直接的なつながりはなくても、つながっているというような気がして、授業への意欲が増す。

⑰一人一人講義中では言えないこと、直接言えないことが教師に伝わるのでとてもよい。

⑱教師と子どもが授業中に話せなくても、対話できる場ができることがよい。

⑲自らのことを振り返ることができる。

⑳授業中ではなかなか質問できないことや、ふと感じたことなどをそのままにすることなく、解決することができる。一対一の関係で教師が身近に感じられる。

ウ. この方法を取り入れることについて (12名)

①毎日、毎時間取り入れるとなると、教師の負担が多くなるが、取り入れることはたいへんよい。

②とても素晴らしい方法である。

③とてもいい。でも、小学校だったら直接話した方がいいのでは?と思う。仏教大学では携帯メールで行うということを見てきたが、高校ならそちらの方があっているかもしれません。

④とてもよい方法だ。ただ、コメントを書く教師の負担が大きくなるのではないかとということだけ少々気になる。

⑤たいへんよい方法である。

⑥全員にコメントを書くのは大変だが、素晴らしい方法だ。

⑦小学生だと自由記述だと書きにくいだろう。「……について」という項目を示して書かせれば、

目的意識を持って授業に臨めるのではないか。

- ⑧小中学校で取り入れることに賛成である。
- ⑨毎回の授業では難しい。1日の終わりに日記のやり取りなどでも取り入れるといい。
- ⑩とてもよい。
- ⑪小中学校ではふだん、やり取りができるのであまり必要ないかもしれません。
- ⑫非常によい。

B. 毎回行った大福帳によるやり取りについて、この方法を大学等で取り入れることについての自由記述内容は次の通りである。()は人数

ア. 教師にとって有益と思われること (6名)

- ①相手意識を明確にもって講義が行われることは情報メディアを超えて大切だ。
- ②たくさんコミュニケーションが生まれる。
- ③教える側の立場になった場合、重要な意味がある。
- ④どちらかという、教師の一人舞台で終わってしまう大学の講義において、お互いの意見を確かめ合い意味で画期的である。
- ⑤授業者が学習者の実態を知ることができてよい。学習者のポートフォリオを通して、教師自身の教育実践力を振り返ることができる。
- ⑥どうしても一方的になってしまう大学の授業ではとてもよい。

イ. 受講生にとって有益と思われること (21名)

- ①自分がその時間に何を学び、何を考えていたかを知ることができる。
- ②教師と学生との距離が縮まる。
- ③何を学んだか、確認できる。
- ④1回1回の授業を漠然としたまま、終わらないようにするために非常に有効である。記録として残すことで自分の学習の経過や考え方の変化・成長を振り返ることができ、有効である。
- ⑤大福帳を使うことで、教師とコミュニケーションをとることができ、授業に対する意欲にもつながった。
- ⑥これまでの大学の授業では半年が経って試験になると、学習したことを忘れてしまっていた。この大福帳のおかげで、思い出すことができた。また、授業の要点を教師が書き足して下さったのを見て、前回の復習にもなった。有意義な学習を構成するために、この方法の導入は必要だ。
- ⑦大学生になると、人によって考え方がことになってくることがあるので、大福帳を通じて、他の人の意見を教えてもらえるととても参考になる。
- ⑧自分の思ったこと、疑問に思ったことに教師が答えてくれるので、授業に興味をもつことができる。
- ⑨この大福帳があることで、他の講義より、目的意識を持って意欲的に取り組めた。
- ⑩学習者自身も授業を振り返ることができる。返事が楽しみであった。わからない点を質問するときに役立つので、ぜひ取り入れてほしい。
- ⑪毎回考え、思ったことを書けるので、授業の復習によい。コメントが帰ってくるので質問しやすい。
- ⑫受講者の知りたいこと、要望に迅速に対応するところはすばらしいし、学習意欲もわく。
- ⑬授業者の意見(返事)を読むことで、授業のポイントを再確認できてとてもよい。一人一人

に返事があるので、やる気もでてよい。

⑭さまざまな意見が聞けてよい。

⑮授業終了時に、授業全体の振り返りとして有効である。

⑯目的意識をもって授業に臨める。教師との距離が近くなる感じがする。

⑰大学生は小中学生よりも教師と接する場が少ないので、交流できてよい。一人一人の提出物をみて下さる教師の熱意が伝わるし、次の講義にくるのが楽しみである。

⑱教師からのコメントでさらに自分の学びや好奇心が深まることも多かった。教師の授業に対する目標をこのコメントから読み取ることができた。

⑲これは教師とのやり取りができるので大賛成だ。

⑳どうしても一方的になってしまう大学の授業ではとてもよい。1時間の授業を考え直す時間にもなり、疑問に思ったことを解決することができる。

㉑+①自分の興味あることや疑問点を自由に書けたので、有意義だった。

ウ. この方法を取り入れることについて (17名)

①質問したいことを気軽に聞くことができる。

②教師と学生がいっしょに授業を作っているように思った。

③自分自身で1時間を振り返るということはいいものだと思う。

④教師と学習者がお互いを理解するためのコミュニケーション手段となりうる。相手を評価する・学習するという点において、相手と境を作らないことは大切だ。教師と学生の距離を感じさせず、人・時・場をつないでくれる。

⑤大学だと講義なので、なかなか効果は上がらないかもしれないが、よい方法である。大人数になると手間もかかり効率面からみて大変である。それなのに、教官は最後まで続けてすばらしい。

⑥大学の他の教師も取り入れてくれたら、もっと充実した学びになると思う。

⑦人数が多い授業では教師とコミュニケーションをとるのが少なかった。たくさんの人にコメントを書くのはたいへんだったと思う。丁寧なコメントに感謝。

⑧今回このような方法で学習できて大変よかったと感じている。教師は大変だが、ぜひ続けてほしい。

⑨大学でもたいへんおよい方法である。

⑩賛成である。

⑪大学でここまで丁寧に学生とやり取りをする教師はめずらしい。

⑫大人数の分を毎回目を通しコメントすることは並大抵なことではない。教師の努力に誠意を感じた。

⑬大学で行われている学期末の授業改善アンケートよりもよいものになる。

⑭大学でこの方法がめずらしい。とてもよかった。

⑮大学の授業ではレポートを出してもそれっきりで、どのように評価されたのかわからないことがほとんどだ。

⑯教師の教育者としての姿勢を学ばせてもらった。大学でもこのようなきめ細かい教育が必要だ、大賛成。

⑰自由度の高さはとても大切なことである。

4. 考 察

今回導入したシャトルカードは、受講生からの伝言欄にはその時間の講義で理解できたこと、疑問に思ったこと、要望等が記され、それに対して授業者が確認や訂正、補足説明を記述し、そのやりとりが13回すべてについて、表と裏の1枚の厚紙のカードになっていることによって、学習の履歴を一覧することができるようになってきている。そのことによって、受講生には、学習内容の連続的理解が促進され、次の学習への意欲向上につながったのではないかと考える。

また、受講生からの授業方法に関する問題点の指摘、改善要求等を次の回の冒頭で全員に紹介し、その回から改善の努力をする旨の宣言をし、具体的に実行に移した。そのような真摯な対応が、授業者と受講者の間に信頼関係を生み、積極的な受講態度への反映と同時に、毎回の授業を授業者と受講生全員で創造しているという風土が醸成されたと考える。

さらに、アンケート調査の結果にも見られるように、大学教師自らが自分自身の講義において、受講生とのコミュニケーションとインタラクションを密にとることの必要性を、受講生に身をもって体験的にモデルとして示したことが、教職を目指している受講生に対して、教師の役割を再認識し、授業実践に対する考え方を再考させるきっかけを与えることができたと思われる。

5. 今後の課題

本稿では、筆者自身の実践とそこで得られたデータを筆者自身で分析するという方法での考察であったために、個人的判断傾向をできるだけ取り除くための配慮として、シャトルカード及びアンケートに実際に記された文言を忠実に記載して考察するということに留意した。しかし、本来ならば、複数の研究者の協力を得て分析する、いわゆる、Denzin (1989) のいう「調査者のトライアンギュレーション」の方法を用いてこのデータを再度分析することが課題として残されている。また、本報告は、J大学での1つの授業実践から得られた知見を示したにすぎない。

筆者は、平成16年度前期に、N大学において受講生160人の講義において、取り組んでいるが、今後、他の授業者の講義、他の大学での他の講義での実践を積み重ね、学生からの授業評価を大学の授業改善に生かす方法としてのコミュニケーションカードの特性と機能、及び実施する上での要件等を明らかにすることが課題として残されている。

引用・参考文献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹 (2001) 成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集, 玉川大学出版部, pp. 143-156
- 織田揮準 (1991) 大福帳による授業改善の試み—大福帳効果の分析—三重大学教育学部研究紀要第42巻 (教育科学) pp. 156-174
- 織田揮準 (1993) 大学の授業を斬る—学生の学生による授業評価票の作成と実施—三重大学—般教育大学教育研究—三重大学授業研究交流誌, 創刊号 pp. 11-17

- 織田揮準(1995) 学生からのフィードバック情報を取り入れた授業実践, 放送教育開発センター
研究報告83 pp. 5-17
- 香取草之助監訳 (1995) 授業をどうする! カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のための
アイデア集, 東海大学出版会, pp. 128-140
- 向後千春 (2002) 心理学授業における「大福帳」カードの利用と効果, 日本教育心理学会第44
回総会発表論文集

A Trial of Lesson Improvement with Communications Card “Shuttle Card”

Masatoshi NAMBU*

ABSTRACT

The purpose of this research is exploring the method of lesson improvement in an university of education. In this research, I tried to continue the exchange of the message and comment between all students and teacher using the communication card every lesson, so that I could reflect their opinion and improve my lessons by next week. As a result of analysis of a questionnaire, it became clear the following three things.

(1) It became obvious what students have understood or have doubted in the teachers' lessons. At the same time, teachers wrote back some comments for all students like correcting errors or some extra advice every lesson and it made it possible to store and share the record of lessons. It was also helpful for them to recognize their continuous learning, to promote understandings of the contents of each lesson, and to improve in learning motivation.

(2) In response to point out the problems about the lessons' method from students, teachers could immediately reflect their improvement in the following lessons. It had a great effect on making a new style of the lesson which were created with teachers and all students as well as making a confidential relationship between them.

(3) It could be a great opportunity to give a chance to recognize the importance of a teacher's role and the method of teaching again.

* Center of Educational Research and Development